

D. 継続的・計画的な指導についての研究

大部分が無難に社会に出て行くものであるといわれるが、遂に不適應のまままで終る例も又少なくないようである。進路指導では、そのようなよくない結果になる可能性のできるだけ少い方向を求めなければならない。又適應するにしてもそのし方が問題であり、なお意欲的な学習や習練にスタートする時期を早くする、その

ために希望を早く持つことが大切であろう。

希望を与える指導とは、希望が将来瓦解するものにならないために、できるだけ正確な能力、即ち適性の発見や啓発ということが、そこで行われるものであろう。
(中野満男)

Ⅳ 適性と進路指導

1. 進路指導の本質

生徒の卒業後の進路は、究極的には生徒個人の問題であり、生徒みずからの判断で決定すべきものであることは論をまたない。したがってそういう前提に立って進路指導を考える場合、そこに指導の範囲ないしは限界といったものを考えておく必要がある。

従来からこの学校においても、学力成績をもとにしての進路指導はかなり徹底して行なわれている。校内外模試は、あるいは拍車となり、あるいはあきらめ的手段となって、進路決定上重要な役割を果たしている。このような学力面からの進路指導も、今日の現状では必要なものと考えざるを得まい。しかし進路指導の本質はその生徒が将来社会に対して果たす役割というものを究極の目標としてなされるべきものである。単に学力だけからの判断ではとうてい個人の可能性を予測することはできない。平素からの学習指導や生活指導を通じ、自分みずから適確な判断を下せるための資質・能力・習慣をつけておくことが、進路選択決定を自主的に行なわせるための不可欠な条件である。進路指導はいわばそのような諸指導の最終段階としてとらえるべきであり、平素の学習やホームルームなどの活動と有機的なつながりを持つべきものとする。

2. 適性の意義

一口に適性と言っても、それがどういう意味なのかかなりあいまいなものが感じられる。ここでは学力成績とは別のもの、すなわち各個人の持つ先天的あるいは後天的の性格的諸特性ということに限定して考えることにしておく。ただしこれを進学希望者を対象にした場合、そこに学力成績と何らかの関連があることもたしかであろう。一定の学力水準に達しない者が、文化系であれ理科系であれ、大学教育そのものを受ける適應能力を欠いているのは当然のことと考えられる。すべての者は、等しく大学教育を受ける能力を有するものであるという前提でことを考えるのならば話は全く別である。ところが現実には、どう見ても大学教育を受ける能力学力を有しない者が進学を希望し、えり

好みさえしなければ必ずどこかの大学へ入学して行くのである。進学そのものへの適性の目安は学力ばかりではない。勉強意欲とでも言うかより高い学問への志向といったようなものが必要なのではないか。この点からみても、不適者が多数大手をふって進学している。こういう広義での（あるいは根本的な意味での）適性はややもすると問題外にされがちである。

狭義での適性を考えるなら、ことは比較的単純である。理科系・文化系・家政系などの学部系統への適・不適ということになる。理性・感性・根気・ねばり・集中性などの特性がその手がかりとなろう。問題は生徒個人個人が、自己の特性をどの程度正確にとらえているか、またその特性と志望進路とをどれだけ関連づけて考えているかということである。また指導する立場からすれば、生徒個々の特性をどの程度知り、それをどのように指導するかということが問題である。そこで適性の判断がどのようになされ、どのような問題をかかえているのかを考察してみたい。

3. 適性の判断の現実

受験生が何を進学の目的としているかを調査してみたところ、本校生徒の場合、最も多かったのが、「就職の条件をよくする」ということ、第2に、「専門的学問技術」第3に「一般教養修得」ということであった。同様な調査を名古屋大学学生に対してなされたのを見る機会を得たが、それによると、専門的学問技術、一般教養修得、就職条件の順になっており、就職条件をさほど重視していない傾向がみられるが、ある程度将来を約束されたエリート大学という見地からのものであって、全体的な立場からみれば、むしろ本校のような上下すべての成績階層を含む受験生による結果の方が、平均的な考えをあらわしているのではないかと思われる。むしろこのような目的はそれぞれ単独で存在しているわけではなく、程度の差こそあれ、各人が共通して持っているものであろう。それでも、今日の進学の目的は、第1に就職のことがあり、専門的学問技術が第2位になっていることはたしかであると

思われる。更に一般教養修得を第1に挙げた者に女子が多いのは、花嫁修業的なものを考えてのことであろうと推察される。このような風潮の中からは適性への配慮がおろそかになる傾向が生まれて来るのではなからうか。生徒の、自己の適性の把握はどのようになされているのか。実際のところはなほだ浅薄な判断に基づいてなされていると言える。漠然とした、または一時的な興味関心、科目の得意・不得意といったことをもって、適性の有無の判断の手がかりとしている。この判断が確信あるものでなく、正確なものでもないことは、実際に、同一系統でない学部にもまたかけて受験する者が全進学希望者の2割ほどあることや、自分の志望する学部への適性ありと自己判断を下している者が55%にとどまっていることからもうかがわれる。

(本校でのアンケート調査による)成績上位者は各科目の得意・不得意といったことはあまり関係なく、自己の進むべき道をかなり適確に見通していることが多い。問題はむしろ成績中位ないしは下位者(人数割によるものでなく、成績点数からいえば圧倒的多数者である)にあるわけで、特に得意・不得意科目のさだかでない者には、教師の助言指導がもっとも必要であると思われるのである。

4. 教師の指導

教師の行なう進路指導の基本姿勢として、生徒自身の頭で自己の適性を考えさせ、みずからの判断で決定させるように仕向ける、という筋道をとりたいものである。ホームルームでの話し合いを通じ、進学についての心構えを固めさせること、父兄も交えた個別面談により、一そう細かい指導をすることなどはまずどこでも行なわれていることであろう。このような全体指導と個別指導の間を行くものとして、今一つグループ指導といったものが考えられはすまいか。志望校別あるいは学部系統別に、希望者によってグループを作らせ、一定期間をおいて、グループ単位で、その学校なり学部なりの内容、雰囲気などを調査させるといったような試みがなされ得るのではなからうか。

いずれにしても、自己の適性を正しい判断に基づいて正確にとらえている者は少数であるという事実には注目する必要がある。成績のみから判断して、半強制的に志望校や志望学部を指定してやることは、たとえそれが善意からではあっても、破たんを招くことになる。さりとて、生徒の言いなりに受験させていたのでは指導の本質から言ってゼロである。むづかしいことではあるが、ともかく、自己の判断の手がかりを与えてやること、意欲を持たせてやること、を全体的に、あるいは個別的にくり返し試みるほかはなからう。

一時的または表面的な興味関心で適性ありと判断し

てしまう場合が少なくない。興味関心が本物かどうかよく本人に考えさせる必要がある。また、一時的なつまずきである特定科目の成績が急に下がったような場合、その科目に適性なきものとして見切りをつけてしまうこともありがちである。適性と学科成績は相関はあっても絶対的なものではないはずである。

生徒個人個人の性格により、指導内容は変わっていいはずである。ある生徒には単一の学部のみを受験を勧め、別の生徒には幾つもの学部のかけもち受験を勧めるといったことは、十分ありうることである。教師の指導のミニマムエッセンシャルとしては、とにかく大学入学後、不適応現象を起こさないようにさせることと考えられるからである。

いずれにせよ、平素からの生徒との接触のあり方すべてが、指導の成果をにぎっていると見てよい。常に生徒と接し、生徒各人の特性をどれほど把握しているか、また生徒からどれほど信頼されているかが、進路指導の(あらゆる指導がそうだが)成否を決める。その意味で、あまり面識のなかった学年を、高3になって始めてホームルーム担任となることは避けるべきであろう。

5. 適性判定の時期

現在の普通課程の高校では、すでに第2学年で文科・理科・就職などのコース制をしいているところが少なくない。この場合、生徒は適性判定の決断を、第1学年の終りにして強えられることになる。最近の理工系重視の風潮に乗せられて漫然と理科系を選んだり、一時的なつまずきで、理科系の才能に見切りをつけて文化系を選ぶ者がかなりあるのではないかと推察される。高校の1、2年は可能性を伸ばすべき時期であって、固定化させるべき時期はもっとあとの方がよいと思われる。現在の受験体制の持つ種々な弊害のうちで、受験に関係のない教科を軽視することがもっとも大きなものに数えられると思われるが、早期から適性を強調することは、そのような風潮を助長することになりはすまいか。いわば食わず嫌いを正当化し、固定化する方向に働きはすまいかと心配される。低学年のうちには、なるべく偏りを少なくし、むしろどの方面にも進みうる能力や態度を養うよう指導すべきであろう。

(倉田有邦)